

令和2年7月15日

第1回

(仮称) 世田谷区認知症施策推進条例検討委員会
作業部会

午後 5 時 5 分開会

○佐久間課長 定刻になりましたので、第 1 回（仮称）世田谷区認知症施策推進条例検討委員会作業部会を開催させていただきます。

本日は、お忙しい中、御出席いただきましてありがとうございます。私は、事務局の世田谷区高齢福祉部介護予防・地域支援課長の佐久間でございます。議事に入る前の進行をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

初めに、部会の開催に先立ち、高齢福祉部長の長岡より御挨拶申し上げます。

○長岡部長 皆様、こんばんは。高齢福祉部長の長岡でございます。本日はお忙しい中、またコロナの中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。また、委員の皆様におかれましては、今回この条例検討委員会の作業部会の委員をお引き受けいただきましてありがとうございます。この部会につきましては、もう少し早く開催したいと思っただけですが、新型コロナの影響でなかなか状況が整わずに、今日は何とか開催することができましたので、どうぞよろしくお願いいたします。

本部会におきましては、今検討しております「私の希望ファイル」、それから、希望計画の案についても検討していただきたいと思っております。また、今日も御本人の方と御家族の方においでいただいておりますので、いろいろ御意見をいただきながら検討を進めていきたいと思っております。

委員の皆様方におかれましては、限られた時間ではございますが、日頃からの研究や御活動に基づく見地から様々な御意見をいただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

また、大変申し訳ないのですが、急遽、他の公務が入ってしまいましたので、ここで一旦失礼させていただきます。また、19時からの検討委員会には出席させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○佐久間課長 それではまず初めに、本部会は、（仮称）世田谷区認知症施策推進条例検討委員会の下部組織に位置づけられているものでございます。つきましては、本部会で検討してまとめたものを条例検討委員会で御審議いただくものとなります。また、本部会の透明性や区民への情報公開担保のため、会議録につきましては公開いたしたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

続きまして、配付資料の確認をいたします。次第でございます。めくっていただきますと、資料 1 「（仮称）世田谷区認知症とともに生きる希望計画（案）の検討について」、資料 2 「在宅医療・介護連携の推進について」、資料 3 「『（仮称）世田谷区で在宅療養・人生会議をしよう！』について」、以上でございます。

不足等がございましたら職員にお声がけください。

今回は、第 4 回検討委員会に引き続き、認知症当事者及びパートナーのお立場から 4 名の方々に御参加いただいております。御紹介させていただきます。

S・さきこ様でございます。パートナーの小林真理子様でございます。パートナーの蓮見早苗様でございます。認知症のご本人の藤原郁子様でございます。藤原さんのパートナーとしまして、世田谷区認知症在宅生活サポートセンター管理者の永野富美子様にご出席いただいております。その他、事務局職員も同席させていただきます。

続きまして、委員の出欠ですが、本日は全員が御出席となっております。

最後に、本日の部会の終了は午後6時半を予定しております。また、午後7時から本会であります検討委員会を開催させていただく予定になっております。あらかじめ御了承ください。

この後は、次第の1に移らせていただきますので、進行を大熊委員長にお願いいたします。

○大熊委員長 パートナーの皆様、ありがとうございました。

幾つかの話があるんですけども、まず、この希望ファイルについて、それぞれの思いを話していただけたらと思っているんですけども、資料を読んでいらっしゃって、何か御意見、思ったことがありましたら、まずは藤原さん、S・さきこさんから、一言で結構ですのでお願いします。

○S・さきこ氏 まだ読んでないんです。

○大熊委員長 では、この希望ファイルの名づけ親でもある西田先生に、簡単にどういうわけで希望が入るファイルであるかというところを話していただけますか。

○西田委員 お疲れさまです。よろしくお願いたします。

前回の委員会で、条例の中で1つ具体的なことを実現しようというお話があったと思うんですけども、それが「私の希望ファイル」というプロジェクトを、世田谷区の1つの目玉として取り組んでいくのはどうかという話になっていたと思います。

認知症になっていろんなことを諦めたり、認知症になっていろんなことに落胆してしまっって希望が見い出せないという状況が多くの人から聞かれるんですけども、認知症になっても、私はこういう希望を持って生活を続けたいとか、こういう自分の気持ちを大事にして関わる人は関わってほしいとか、御自身が認知症になってもならなくてもなんですけども、こういうふうに生活し続けたいという希望をしっかりと表明していただくというか、お話を聞かせていただいて、世田谷区でそういうことを実現していくために必要なことがあれば、しっかりとみんなでそれを準備していくという、そういう環境が整っていくと良いのではないかという話だったと思います。自分の希望をきちんと表明する、そしてそれを聞いて、みんなでそういう地域をつくって、実現する地域をつくっていくという、そういう仕組みづくりをこれからしていこうというプロジェ

クトであったと思います。

○大熊委員長 ファイルというのも御説明いただけますか。

○西田委員 希望ファイルというのは、そのときそのときでいろいろ希望というのも変わってきますよね。変わってきたときに、どんどん修正といいますか、つけ加えたり変更したりするということで、ノート形式ですと、ずっと書いていかなくちやいけませんけれども、書きたいことを書いてどんどん好きなどころにファイルしていくというか、そういう形で結果的に希望のファイルがまとまっていくと、そういった御本人さんの希望を尊重して、周囲の人たちはきちんとサポートというか、関わるということですね。

一番大事なことは、今まで認知症の人、御本人のお話を聞かずにいろんなことが進んでいたもので、そういうことをなくしたいというのが、この希望ファイルの一番の目標だと思います。認知症の人のお話を聞いて、認知症を持っていてもどういうふうに生活したいかという、まずその人のお話と御希望を聞いてから全てをスタートさせるために、そういうものをきちんと区民の多くの人たちが持てるような地域にしていこうというのが、希望ファイルの構想だったと思います。

○大熊委員長 何かひらめくことがありますか。

○小林氏 希望ファイルというのは、前回のときにもお話が出て、とてもいいと思うんですけれども、これは具体的に、例えば本人が持つものなのか、スタッフさんがつくるものなのか、あるいは共用してどこかに置いてあるものなのか、お家に置いておくものなのか、具体的には全くイメージが湧かないので、それを教えていただけるといいかなと。

○西田委員 ほかの皆さんも御意見がありましたらいただければと思いますが、これは大事なポイントというのは、書いたものを残しておくということよりも、そういうことではなくて、書きながら、その希望を周囲の人たち、関わる人たちとコミュニケーションしていくという、ずっとコミュニケーションを続けていくということが大事で、一番よくないのは、書式ができていて書式を埋めましょうということです。その書式の内容を見たら、最後の医療はどうしたいかとか、結構暗い話だったりするわけですね。大事なこともしれませんけれども。

そうではなくて、御本人から見て、こういうことを私は大事に生活を続けたい、こういうことを理解して関わる人は関わってほしいとか、書きながらではあっても、大事なことはコミュニケーションをして、その人の思いとか願いとかというものの理解を深めていくということですね。ですから、どこに置くということもすごく大事なことだと思うんですけれども、誰がそれを持つのかということも大事なんですけれども、そういうこともここで議論していければいい

いのかなと思います。

1つのイメージは、認知症になる前から多くの区民が、もし認知症になっても私はこういう生活やこういう希望を持ち続けて生活したい、こういうところに住んで、住み慣れたところで生活したいとか、そういうことをあらかじめみんなが書いたり、会話したりする機会が、勉強会なのか分かりませんが、そういうことが地域の中でたくさんできていて、そういうものを皆さんが持っている。それで、いよいよ認知症という診断を受けたとなったら、私はこういう希望のファイルを事前につくってありますから、こういう希望をどうしたらこれからも保持していけるかということについて、関わる方は一緒に協力してくださいと。まずその人の希望を一番の大事な出発点にして、関わるケアとか医療というものもスタートしていくということですね。

でも、大事なことは、サポートされるために存在しているわけでもなし、医療を受けるために存在しているわけでも本来ないわけですから、その人の続けたい生活をどういうふうに大事にしていくかということが大前提で、一部は介護する人たちによって支えられるかもしれないし、医療によって支えられるかもしれないけれども、医療のための事前の意思表示とか、ケアのための意思表示というよりは、御本人さんがどうしたいかということがまずしっかり表現してあって、どういうふうにそれを大事にしていくかということを中心に話し合いながら関わっていく、そういう形がいいんだろうなと思います。

認知症が仮に進んでいったとしても、その希望ファイルを見れば、その人がどんな思いや願いを持ってこれまで生活してきたかということがよく分かるようになっていく。そうすると、このファイルを見た上で、その人に関われる。例えば、その人が言葉が少し出なくなってきたということがもしあったとしても、その希望ファイルをヒントにして、この方はきつとこういうことを望んでいると推測しながら、その方々と一緒に生活していける、そういう形でこの希望ファイルが認知症になる前から備えとしてあって、認知症になったときに、いろんな人とこれを基に話し合おうとスタートして、もし言葉がうまく出にくいなというときには、それがその人の思いのヒントが詰まっているものですよと、みんなでそれを大事にしていく、そういう御本人の希望を中心に最初から最後まで貫かれていく、そういう仕組みを実現していくべきじゃないかと思っています。

○大熊委員長 少し分かってこられましたかしら。それともう一つ、「私の希望ファイル」のほかに、「私たちの希望ファイル」というものもあります。それは、私だったら下馬というところに住んでいますので、下馬の周辺でみんなで話しているうちに、この下馬では認知症になったらこういうふうにしたいなというようなものも含むという感じですけども。

藤原さんは何かありますか。

○藤原氏 先程の説明で大体それがどういうものかというのは分かりました。

○大熊委員長 遠矢さんは、早めにお席を立たなければいけないので、このことを初期集中支援チームとか、いろんな医療の場で考えてこられたので、どんなふうに思っておられますか。

○遠矢委員 私は、桜新町で開業している在宅医であります。特に今、認知症の初期集中支援にも関わらせていただいている、初期集中支援は、認知症になっていろんなことが困り始めたり、戸惑ったり、家族も含めて、そういう方に対して早めに専門の人たちが関わって一緒に考えていく機会になるわけですが、そこでまずチーム員の人たちがやるのは、その人が一体どういう人なんだろう、どういうことを大事にしているんだろう、どんなふうに生きてきた方なんだろう、どんな家族との関係があるんだろうということを細かく聞いていくんですね。

その人の今までの人生みたいなものをきちんと理解した上で、その人らしい生き方を一緒に組み立てていくにはどうしたらいいかということを考えていく。僕はその過程が、まさに希望ファイルを考えていくプロセスというか、過程なんじゃないかなと感じています。

ですので、今、西田先生がおっしゃったように、やはり今までは認知症と診断されると何だろう、もう絶望したとか、つらい気持ちになったとかいろんなことがありました。でも、そこにもし希望ファイルというものがあって、あなたにもっと希望を持ってもらいたいとか、あるいは、これから生きていくのにそんなに絶望する必要はないんだよ、認知症になってもこれからの人生がもっとあるんだよということを気づかせる1つのものになるでしょうし、ひょっとすると僕たちみたいなかかりつけの先生と一緒に希望ファイルをつくっていったりすると、今まで医者も認知症の患者さんとしてしか見なかったところが、ちょっと違う見方がその方に対してできたりとか、そういういい効果をいろいろ生んでいくだろうなという期待を持っています。

一方で実は世田谷区のACP、つまり人生会議で、これから自分の医療の受け方とか生き方をどうしていくかみたいなことも、今、並行して僕らは一緒に関わりながらつくっているんですが、この希望ファイルと重なるところがかなりあって、やがてはひとつながりのものになっていくといいなという期待を持っています。

○大熊委員長 遠矢さんは、スウェーデンのシルビアドクターという称号も持っていていらっしゃるんですけども、この件については世田谷のほうが進んでいますか、それとも、あちらではもうこういうことをやっていたか。

○遠矢委員 どうなんでしょう。あまり向こうの授業ではこういう話を聞いた

ことがなかったので、かなり日本のほうが進んでいるかと思いますが。

○大熊委員長 スウェーデンを超えると……。

○遠矢委員 はい。

○大熊委員長 中澤さんは地域のいろんなグループと関わりを持っていらっしゃるのです。

○中澤委員 この希望ファイルというのは、形ではなくてキーワードじゃないかと思っていますね。だから、もちろん自分で書くということはあるだと思ふし、やっぱりメモしていく、あるいはどういうふうに生きていきたいかというのは書けるうちに書いておきたいとか、それにプラスアルファで、先程大熊委員長が言っていたけれども、地域で「私の希望ファイル」というテーマでみんなで話すとか、それから認知症の人も含めて、私たちにとって希望ファイルって何だろうとか、そういったいろんな話し合いをしていくツールで、キーワードになっていけばいいかなと思っていますね。区は今、区でつくっている認知症のパフレットがあるんですね。「認知症あんしんガイドブック」、この中に似たようなものがあるので、そこを引き出してつくればいいみたいなことを言っていたけれども、そうじゃないと思うんですね。

そうじゃなくて、みんなで話し合うためのキーワードづくりみたいなことで、でも、何かあったほうがいいので、書きながら、話し合いながらつくり上げていくみたいな、そんな形になっていけばいいかなと思っていますけれども、よろしいでしょうか。

○大熊委員長 希望っていうキーワードの元締めである永田久美子さんは、どんなふうにお考えですか。

○永田委員 今までのお話を聞いていてとっても大事だなと思ったのは、やっぱり今までどうしても、どう支援してあげるかとか支援してもらおうかという、支援する、支援されるという考え方が主だったのが、支援する、されるというもっと前に、本人がどう生きてきて、これからも何を大事に生きていきたいかとか、こういうことがあったら希望を持って前向きに生きられるみたいな、本人の生き方ということをもまずはしっかりと中心に、大事に置こうと。そして、それを一緒に実現させていく。いきなり支援してあげようじゃなくて、本人がこうしたいという希望をどう一緒にそれを実現できるのだろうか。

一緒につくるという関係を築かないと、認知症になってからどんどん世話される一方で、本当は力があつたり、言いたいこともあるのに、支援を受ける一方で縮こまってしまふ。いっぱい生命力があるのに、その関係自体で生きる力がそがれてしまったという、今までのそういう反省に立って、いい医療や、いいケアも大事なんだけれども、本人が生きる力をしっかりと保ち、伸ばすため

に、希望というのを世田谷区では大事にしようということで、希望を大事にするという条例を今つくろうとしているんだと思います。

今回の希望ファイルというのは、単に書いてファイルするというものとしてよりも、発想の転換を世田谷区で起こそうという、もっと一人一人が本当の意味で自分らしく生きていくという、それも自分の今までの長い人生とか、自分の内に秘めたたくさんの可能性とか願いを大事にしながら生きていくんだという本人の覚悟も含めて、認知症になってからもそうだし、まだなっていない世田谷区の住民の人たち一人一人が、これからだんだん年を取りながら、認知症になるかもしれないけれども自分は自分として生きていくんだという、そういう覚悟を育むための、そしてそれを個人で頑張ればいいじゃなくて、一緒にその希望をかなえるような区にしていこうと、一緒に共につくり出していくという、世田谷区の本物の地域の在り方を変えていく、それを具体化するための希望ファイルというのをしていこうと。

そういう発想はいっぱい全国であるんだけれども、理念倒れに終わっている地域が多い。希望を持って生きようとか、共につくろうというのは散々言われてはいるんだけれども、じゃあ、実際どうかというと、現実には本人の話も聞かないで、本人がどうしたいかも分からないで、専門職は特によかれというものをどんどん進めていって、やっぱり理念と現実にすごくギャップがあったのを埋めていく装置として、この希望ファイルを通じて、本人ももっと表明、発信していこう、自分はこうしたいというのを出せる道具としても使ったり、その本人と一緒に地域で私たちが、これからこの地域でどうしていくのかを一緒に考えて、一緒に考える中に友達もいてもいいし、家族もいてもいいし、お医者さんや専門職も一緒に考える仲間の一人として入っていきながら、私たちの希望を一緒に地域で考えるみたいなことを進めていく。どんどんやりながら発展していくための進化系の道具にしていけたらという、そんなイメージなんじゃないかと思います。

○大熊委員長 例えば藤原さんは、今まで絵本の読み聞かせとかそういう活動をされてきたので、私の人生がこんなふうだったのよというのをちょっとここで御披露いただけますかしら。私はこんなふう生きてきて、こんなことが楽しかったという。

○藤原氏 私自身のことですね。

○大熊委員長 そうです。

○藤原氏 今の読み聞かせとかそういうものは、読書会というものをつくりまして、それは親子読書会、親と子が、血縁関係じゃなく、大人と子どもという立場で1冊の本を読み、それをお互いに感想などを話し合う会、親子読書会というものがあまして、その中で、やはり自分の子どもの発言とかを聞いたと

きに、ふだん親としてしか見ていなかった視点が、子ども自身が人として意見を述べてくれるという中で、我が子だけではなくて、皆さんのお子さんの声とかも聞かれて、そこで、それがまた本だけの問題じゃなく展開していて、いろんな発想もそこで生まれて、そういうことを全国レベルでやってきたんですね。今現在、私、こういう体調で参加もできないんですけども、全国レベルで50年の歴史があります。

それはそれとして、そういう中で、子どもたちだけの活動というものがあまして、それは全国組織でやっている読書会という組織の中で、年に一度、全国交流会というものがございまして、その中で、子どもたちは子どもたちで活動する場を設けるんですね。友だち村と申しまして、そこで子どもたちが自分たちで運営委員会を設けまして、いろいろと計画して、子どもたちは子どもたちで活動して行って、親は親でいろいろと分科会をつくっていくんですけども、そういうことを経験できて、今思い出すととても楽しいときだったなと思います。

○大熊委員長 幾つくらいのときからそれに関わられていたのですか。

○藤原氏 そうですね、子どもが3歳のときですから、30代半ばから。それで、その延長で、こども文庫というのがありまして、具体的に言うと、今、喜多見東地区会館、その3階に図書室がございまして、そこで週に1回、子どもたちが集まって読み聞かせをしたり、手遊びしたり、昔話をしたり、最初は100人ぐらいのお子さんが集まったんですけども、あの建物が最近、何年ぐらいか前に建て替わったんですね。そのときに、携わっている者の年齢が高くなっておりましたので、この際、もう閉じましようということで活動は終わりました。

○大熊委員長 今のは希望ファイルのやり方に、ヒントになるような子どもたちも関わるとか、お話をしながらという、とてもすばらしい提案をいただきましたね。

○藤原氏 本当に過去形ですが……。

○永田委員 藤原さん、すばらしい話、ありがとうございます。実は私の今までやってきた中で、今日、話し合っている希望ファイルに似たものを長年地域で使ってきているんですけども、ある地域で学生さんが年配の方の話を聞きながら、御本人はいっぱいしゃべってくださるんですけども、なかなか字で書くとなると、苦しくて面倒で言葉も止まっちゃうような方もいっぱいおられて、いっぱい思いっきりしゃべってほしいので、それを若者が一生懸命聞きながら書くということをやったら、学生さんたちがショックを受けるほど、年配の方の話の豊かさとか、こうやって若い頃にやってきたんだなって、学生さんのほうが話を聞いた後、うれしかったとか、感謝したりとか、また聞かせてくださいという、本人も思い切り話せてうれしかったし、学生さんたちも、どん

な大学の授業より面白いぐらい、そんなすごい生きた歴史を学べたり、本当に人が生きていくってこうなんだなみたいなのを、すごくいい機会になったみたいなことがあったので、希望ファイルも、これから世田谷で生み出そうとしているのも、本人が書くというだけに閉じこもらないで、語りながら、本人がどんどん内なるものを出せる、もっと眠っている希望とか大事にしているものを出せるようなことを大事にして、それをよかったら一緒に書きとめてくれるような人を、学生さんとか若い子にいい出会いと学びの機会として、1つの方法として、ちょっと年上の人の話を若い子が聞いて代筆しますよなんていうことがあるといいなと思いました。

それから、聞き書きの文字だけじゃなくて、イラストにしてくれて、その方の話から若い頃の地域の様子とか、そのときの本人の大事な思い出とか、絵本のようなものを勝手につくった若い子がいて、本人の話を一緒に聞きながら、いろんな表現方法がある、いろんな伝わり方とか共有の仕方があるので、あまり書式を固めすぎずに、どんどん創意工夫を一緒にしていけるといいんじゃないかなと、今お聞きしていて思いました。

そして、そういうものを広げるときに、今まで藤原さんが培ってこられた読書会とか、地区会館の3階を利用して、みんなが集まって、本当に少人数でもそういうことをしゃべり合って、じわじわとそういう大事さとかを広げていく、これから世田谷のまちで浸透させていく上での推進役に藤原さんとかS・さきこさんになっていただく。昔取ったきねづかで、読書会のように、一緒に話し合って、一緒に学び合って、一緒につくっていこうというのを50年やってらっしゃるなら、もうこの希望ファイルの普及役に一番最適なんじゃないかって思ってお聞きしました。ありがとうございました。

○大熊委員長 絵で描くとしたら、S・さきこさんのような方は、御自分の人生を絵で表すということはできますか。または、人から聞いてそれを絵にするとか。今までの話を聞いて何か感想がありましたら、どうぞ。

○S・さきこ氏 今まだ吸収中で、あまりまとまらないんですけども。私は、この病気があるないに関係なく、今でも思いついたものを絵にしたりとか、字にしたりとか、相手がどうこうじゃなくて、自分の中の消化をするために、自分への訴えみたいなものを書いたりすることは増えました。子どものとき作文が大嫌いで、字を書くのは一番嫌だったんです。もう学校の宿題を放り投げて母にいつも怒られて、嫌だな、こんなんじゃ駄目だろうなって思いながらも、気がついたら大人になっていまして。実際に今度は我が子を育てたときに、子どもは私と違って本を読むのが大好きですし、字を書くのも好きな子だったものですから、放っておいてもばりばり書くんですよ。これ、遺伝子じゃないのかとかいろいろと考えたんですけども。

私は美術の学校を出ていたので、美術だけを学校で教えていたんですけれども、いろんな子どもたちに接してみて、考え方とか物の言い方とか、本当にいろいろとあるんですね。自分の中でどういう形で子どもから大人に育ててあげるのが正しいのかっていうのが、実のところを言うとだんだん分からない部分がたくさん出てきて、専任でなかったということもあったので、幸いなんとか定年まで働きましたけれども、もしこれが担任を持っている先生の仕事をしていたら、子どもたちを育てられなかったかもしれないって思うぐらい、今の子どもたちはすごく幅があるんですよ。

それで、自分がこうやって、あまりうれしくないですけど、親譲りで認知症が始まったときに、お母さんと同じになっちゃったらどうしようとか、おばあさまもそうだったので、いや、これはすごい濃厚な遺伝子をもらってしまったとちょっと落ち込んでいたんですけれども、ぎりぎり退職のときまで何とか勤められたので、今は自分のことだけ何とかしようと思っていれば済むことだったんですけれども、学校に行っていたときは本当に結構苦しい、こんなんでいいのかなとか悩むこともたくさんあったりしたんですけれども。

これは子どもも大人も一緒なのかもしれないんですけれども、子どもでも大人でも、みんな自分の気持ちを人に聞いてほしいという思いがあるんですよ。でも、全部聞いていたら終わりがないところもいっぱいありまして、それで、はいはいとかって聞いてあげちゃう、いいかげんな返事をする、子どもはそういう態度を見透かすんですよ。それで、あの先生は駄目とかいいとか評価がすぐ出てくるし、学校というところは怖いところなんです。私は専任じゃなかったために、幸いにも美術しか教えなかったんです。本当に子どもたちの純粋な部分だけを見て授業をしていたので、楽しかったんですよ。

いざ自分がこうやって高齢化してきますと、あの子たちと接していろんなものをいっぱい得たのに、端からぽろぽろ抜け落ちていく自分がいて、今はすごく切ない。だから、何かそういうのをもっと形にして表しておいたほうがよかったのかなとか思うときもあるんですけれども、とにかくこうしたいとか、ああしたいという願望がとってもあったんですけれども、この病気を背負ってしまっただけからは、やってもどうせ最後まで到達しないんじゃないかって、自分の中で諦めみたいなのが出てきていて、母を見ていて、同じ病気だったものだから、やっぱりああいうふうになるしかないのかなというのを今自分で思っていて、それだったら、今、自分ができる楽しいことをいっぱいしたほうがいいんじゃないかなというふうにちょっと思っているところがあって、本当は残したいことがいっぱいあったのに手をつけることもできなくて、しょうもない人間になっちゃったかなって今ちょっと反省はしているんですけれども……。

この病気と闘う方法が今自分で見えなくて、もっと頑張れば、自分が思っ

いたことも仕事でやれるのかもしれない。学校の仕事を辞めてからやれば役に立つことがあるのかもしれない、メモ書きはいっぱいつくっても、結局そこに腰を据えて作業ができなくなっている自分がいて、やっぱりもう諦めるしかないのかなと……、年齢も年齢なのでと思うようになっちゃったんですけども、何かそういう病気に自分が負けないように頑張れるような方法を考えなきゃいけないなと思って、実は、今はなるべくめげないように生きようと思っているだけなんです。

○大熊委員長 今の2人の話から触発されて、どうぞ、皆さん。

遠矢先生、今みたいなことを訴えていらっしゃる方に出会ったらどうされますか。

○遠矢委員 本当に自分も一緒だなというか、いろいろやりたいことがあってもやらずにいたり、ただ時間が過ぎたりということはあるし、これは認知症の話じゃないかと。人が生きてると、みんなそういうことで思い悩み、苦しみというところがある。もちろんそれがすごく早まってしまう、がんになっちゃったとか、若くしてそういう病気になったという方もいらっしゃるし、だから本当にこの希望ファイルって、認知症の方のためではなく、全区民、全国民のための希望ファイルであるべきだなというのを、今お聞きしていて感じました。

○大熊委員長 中澤さんはどう思われますか

○中澤委員 私ももう71歳なので、そろそろいろんなことが出てくるんじゃないか、できないこともだんだん増えてくるんじゃないかという気がしています。

それは、年を取っていくからしょうがないことなただけけれども、でも、何かできることを見つけていくことはとても大切だなと思っていて、希望ファイルなんて言っちゃうとちょっとおこがましいんですけども、さっきの読書会でもそうなんですけれども、あるいは畑をつくるとか、そんなに無理しないでもやりたいことはいっぱいあるんじゃないかと思うんです。だから、そういうことをみんなでするきっかけにしていく、そんなことも出てきていいんじゃないかと思うんですね。

○大熊委員長 後でいらっしゃる長谷川先生が学会長のせたがや福社區民学会では持ち回りで大学を拠点に次々にやっていくので、それらの学生さんたちに加わってもらえるのもいいかなという気がしたり、先日行った小松市では、公立小松大学のカリキュラムの1つで、活気を得てみんなとても幸せになるというものがありました。

ここに、今、永田先生が今までのをメモしてくださっていたので、中間まとめみたいなことをお願いします。

○永田委員 今すごくS・さきこさんの話を聞いていて、まさに希望ファイル

を何のために生かすかのすごく大事な話をしてくださったと思うんです。地域で展開とか、いろんなやり方はあるんだけど、まずはやっぱり本人がどう生きようとしていて、今現実には、何が苦しかったり、何を模索しているかというのが、ただ一般に話していてもなかなか出てこない、ケアマネジャーさんとか支援者がいても本当にその人にとっての苦しみとか願いのところまで、なかなかたどり着かなくて、表面的な関わりや支援だけで終わって、せっかく出会ったり、サービスもあったりするのに、本人が今、本当はこれなのよというところを通過しちゃって、本当に両方にとってもどかしさが漂っているのが今の現実だと思うんですね。

今おっしゃった、自分なりにやれることを見つけたり、自分なりの、しようもなくなんかない、今の自分の大事な時間をもっとこうやるために何が本当にできるんだろうとか、せっかく書きためたいっぱいメモとかを、1人ではごちゃごちゃになるけれども、ゆっくりとその内容を教えてもらいながら、整理してくれる人がいたら、もしかしたら、その中からできそうなことが見つかるかもしれないとか、せっかく出た言葉を聞き流さないで、そこから組み立てていく。そして、明日は今日よりももっと希望を持って生きられるという、そんな瞬間、瞬間をつくるために、この希望ファイルをもっと具体的に、本人とともに生かそうみたいなそういう道具になったらいいなと、今聞いていて思いました。

突然マイクを振られて、こんな短い時間に、S・さきこさんも、藤原さんも、物すごく深い、御本人じゃないとできない話をしてくださる。そういうことを本当に区民で、たまたま認知症になった人たちにもそういうチャンスをもっとつくって、そのしゃべったことから一緒に組み立てていくみたいな、そういうことをしようという、この希望ファイルは本当は何ためのもので、何をしようとしているのか方針とか考え方とか、今日おっしゃってくださった、どういう流れで、骨格をまずしっかりと、分かりやすくつくって示していくことが非常に重要だなと思いました。

どうしても項目とか、希望ファイルの形ということにばかり目がいってしまいうんだけど、形はもしかしたらその後でもいいくらいな、何のための希望ファイルかというのを明確に打ち出すというのを、大事なこの部会の役割にしたらいんじゃないかなと思いました。

○西田委員 S・さきこさん、藤原さん、ありがとうございます。うまく整理できていないんですけれども、認知症という試練を経験しながら今生活しておられる藤原さん、S・さきこさんだと思うんですけれども、今のお話を聞いているときに、認知症というのは僕の中からも全然飛んでいって、藤原さんの人生とか大事にされてきたことはすばらしいなとか、S・さきこさんの今まで

の人生ってすばらしいなという、本当にもっと伺いたいという気持ちが出てきますし、私も子どもがまだ小さいので、子どももしょっちゅう、学校から帰ってきてあの先生は駄目だ、この先生はどうだとか言っているんですけども、本当にそうだなって、子どもの話もいろいろ伺いたいなと思いました。

○S・さきこ氏 聞いてあげてください、先生。

○西田委員 そうですね。それで、やっぱり僕からすると、世田谷の先輩たちがこういうふうに住んでこられて、認知症ということを経験しながら、今までどおりにうまくいかないところも少しあると思うんですけども、本当はいろいろなことをまだやりたいとか、本当はこういうことをもうちょっとやりたい、というお気持ちも多分あるんだろうなと思っていて、そういうことを実現していけるコミュニティというか、仲間や地域というものをつくっていくことがこれから大事だなと思っていて、藤原さん、S・さきこさんの人生のお話を聞く中で、こういう希望をこれからも、私たちも一緒に関わって、続きを聞かせてもらいたいなという気持ちになってくる経験を今させていただいて、そういう機会をいっぱい世田谷の中でつくれるといいなと。認知症の藤原さんとか、認知症のS・さきこさんということじゃなくて、やっぱりS・さきこさんの人生や藤原さんの人生をたくさん教えてもらいたい、聞きたいお話がいっぱいだなというふうに思いました。

だから、そういう中から希望や生きる意欲というのが、どういうところがポイントと考えられるのかなと。希望は何ですかとか、どうしたいですかといきなり聞かれても、多分そういうのは出てこないと思うんですよ。周りにも気を使って、これぐらいにしておこうかなみたいな希望。本当はイタリアにでも旅行へ行きたいんだけど箱根くらいみたいな感じになるのかもしれないけども、そうじゃなくて、こういう人生を歩まれてきたら本当はこういうお気持ちなんじゃないかなとか、そういうことを話し合っていくことがすごく大事で、今回この希望ファイルをどういう仕組みづくりにしていくかというスタートですけども、本当に短い時間の中で、大事なポイントを教えていただけましたと思います。ありがとうございます。

○小林氏 姉はずっと美術をやってきたので、退職したのは65歳なんですけれども、姉はちょっと早期に認知症になっているので、体が自由に動くし、元気だし、やりたいことがいっぱいあったと言っていて、実はそれを実現させてあげたくて、娘も私もものすごくいろんなことを探してきて、やってもらったんですけども、ただ、これはすごく難しく、姉は自分の美術を生かして誰かに教えたり、ちょっと助けてあげたり、そういうことをしたかったんですね。それをさせてあげたいと思って、いろいろな施設だとか、老人ホームとか、そういうところでボランティアができないかとか、お願いをして、ボランティア

にもしばらく行ったんです。

最初は全部付き添いで行って、姉がそこで少しずつ教える形で。でも、現実的には、あちらにはいろんな時間的な流れとかもあるので、やはりそれを制御してくれないと困るんですね。なので、私たちがついていって、お姉ちゃんもう終わりにしないととか、今日はここまでにしようとかと切り上げないと、熱が入っていますし、やってしまうじゃないですか。何度か行って時間も場所も覚えてくれたし、じゃあ、今度はアート作品をつくる時、お姉ちゃんだけ行ってもらうかなと、最初は施設の方もどうぞと行ってくださって、私とかがいらないほうが自由ですごく楽しかったらしいんですけども。その後、次のときにどうしたらいいですかと電話をしたら、家族の人が一緒に来てくれないんだったらもう無理ですと言われて、そういうのを幾つもやってきて。

例えば、それはちょっと難しかったのかもしれないんですけども、体の不自由なお子さんの施設で遊び相手をするとか、そうすると、そこでは嚙下機能の悪い子がおやつを食べたら必ず1回エヘンをしなきゃいけないとか、そういうのは覚えられないじゃないですか。私だって覚えられないのに、姉とかに急に、この子は食べる時はそういうふうにしてくださいとか言われてもできないのでちょっと危ないことになってしまって、ああ、やっぱりちょっと難しいので誰かと一緒じゃないと、というふうに言われてしまうんですね。

でも、現実には、家族とかみんなは仕事をしていて、なかなか毎回ついていくというのは無理なことで、やりたいことはいっぱいあったんですけども、それを活かしてあげるためには、何かもう一つ段階がないと、一緒に行ってくれる人なのか、それを許した上で参加してくれる人なのか、あるいはそういう会をつくってくださるのか。今、蓮見さんとかがいつもお迎えに来てくださって、そうでないとやっぱりちょっと時間的に難しいんです。約束がなかなかできないので、今日も朝からお電話をしてくださって、多分姉は手に、どこに何時と書いて、それでないと忘れてしまうので、やっぱり相当サポートがないと自分たちのやりたいことをやるのは難しいんですね。

ですので、その辺りを、もし、いろんなことが変えていけるのであったら、希望ファイルの内容が初めて生きてくるのかなと。思うことはすごくたくさんあるんですけども、いっぱい試みてみんな失敗に終わり、みんな拒否されちゃったので、現実はずごく厳しいんですよ。

ですので、姉もやらなかったわけではないですし、みんなで一生懸命やった結果が、もうしょうがないから楽しもうかなになったんですね。ですので、その辺りを、現実のありようというのをちょっと感じていただけたらと思います。ちょっと失礼かなと思ったんですけども。

○大熊委員長 永田先生、そういう事例はたくさんお持ちだと思うので。

○永田委員 ありがとうございます。まさに今、この世田谷の希望条例もそうですが、少しずつ世の中で動き始めたのは、本人と御家族も含めて当事者が言わないと、一生懸命やりたいことがいっぱいあったのに、それが叶わなかったことがこんなにあるぞというのが埋もれていて気づかれていない。専門職も行政も気づかないことがいっぱいあるというのが、ようやくこの5年、10年ぐらゐの間に出てきて、今、初期の空白の期間と言われているぐらい、せっかく診断されたのに、特に初期の頃、本当にやりたい思いとかエネルギーがあっても全然それを活かすことができない。まさに今おっしゃったような悔しい思いがいっぱいあるというのが出てきて、そこを変えていくためにも、本人や御家族も含めて発信をしていただいで、周りもそれを聞いて、そこから作り出さない。

大事な医療や介護は相当育ってきてはいるんだけど、本人が普通に暮らす、自分の本読み会を、できる範囲で読める場をまたできたらいいなとか、自分なりに絵を教える。絵を教えられるのに行き帰りのサポート、一緒にちょっと行ってくれる人がなかなか見つからないとか、御家族にわざわざ頼まないといけない、御家族が一生懸命やるだけでは、本人も御家族もお互いに息苦しくなる。本当にちょっとした支えがもっとあれば、特に初期の頃はもっと元気で、心の底からやりたいことをやって、自分らしく楽しめるチャンスを増やせば、どれほどもっと安定して力強く生き続けられるかという、本当にそういうためにも、今日のようなお話を具体化していく、その道具として希望ファイル在世田谷で具体化していけたらいいなと強く思いました。ありがとうございます。

○大熊委員長 今回のS・さきこさんのような例は、どういうふうにしたらば、彼女の夢が叶うんでしょうか。

○永田委員 先程から話に出ているように、今日聞いておしまいにしなくて、多分蓮見さんとか永野さんも聞いていらっしゃる話だと思っただけでも、そこから今日のお話を、まさにファイルとして書くだけでも手がかりがいっぱい見えてくる。一部の人だけだと、誰がそばで一緒にやれるかとか、それも本人たちが、S・さきこさんや藤原さんが相性のいい人じゃないと一緒にというのは嫌だろうし、本当に思いきり今日みたいな話をまた身近なところでしていただいで、いいねって、そのメモと一緒に整理しようよとか、絵を描きたいんだけども教えてもらえないかとか、50年の技のある本の読み聞かせ、子どもと読むとかみたいなことをこれからまた一緒にやれないかとか、一緒にやろうという人がつながっていく、そういう動きを、希望ファイルをきっかけに地域で展開していく、まさにアクションをしていくといいだろうなと思います。本人の希望からアクションが生まれる。

地域づくりとかよく言われるけれども、漠然とした地域づくりではなくて、S・さきこさんとか藤原さんの願いが叶うための地域のつながりとか、S・さきこさんや藤原さんの提案からこんなことが本人と一緒にできるというその喜びを分かち合えるきっかけを、ぜひ地元でつくってもらえるといいなと思います。多分いっぱい実現できそうなことがありますよね。絵とか本とか、お話を聞く会でもいいしね、そんなふうに思いました。

○大熊委員長 せっかくなので、それが時間切れになっちゃうといけないので。

○永田委員 今は、皆さんの話をただただひたすらメモしただけです。今日、出たのは、大きく分けるとやっぱり希望ファイル。最初の小林さんの投げかけから、言葉としては分かるけれども、誰がどんなふうに活かすものなのかとか、つくるものかというイメージがやっぱり分かりにくいというのがあって、希望ファイルの狙いだとか、活かし方みたいなのが誰にでも分かるような、そういう分かりやすい説明や共通イメージをしっかりと打ち出して、この希望ファイルを進めていくためのまず大事な部分としては、説明をきちんとできるものをしっかりとつくる必要があるというのが出たと思います。

それをきっかけにして、希望ファイルというのはこういう狙いのものだとか、こういうことに活かせるという狙いだとか、活用の仕方みたいな声が今日いっぱい出たので、希望ファイルとはどういう狙いで、どういう活かし方があるかという素材をつくっていく材料が今日いっぱい出たかなと思います。

あとは、やっぱりポイントとしては、書く書式が問題ではなくて、話し合う、本人が思いきり本音を出せるような話し合う機会と、話しながら本人も自分ももっとこういうことが言いたかったという、本当の希望がどんどん湧いてくるような話し合いの場づくりが非常に重要なんじゃないかというのが出たと思います。そういう面で、希望ファイルという書式をつくるのも大事なんだけど、その書式を活かしながら、その後、先程出ました地区会館でもいいし、それぞれの身近なところで話し合う場づくりをどんどん世田谷で広げていくこと、そういう仕掛けを組み入れていくことの大事さも出たかなと思います。

そういうのをそれぞれの地域包括支援センター単位でやったりとか、希望ファイルを基に話し合いをすることが、条例を推進していくいろんな立場を超えた仲間づくりの大事な、そういうところで地域づくりのチームが育っていく、その中心が希望ファイルになっていくんじゃないかな、本人の話を聞いて話し合うということを中心にしながら、条例のそれぞれのエリアの推進チームが育っていくんじゃないかなというのが重要な点だったと思います。

○大熊委員長 特に医療との関わりで、人生の最後のチームと今日の話とのつながりみたいなものを感じられましたでしょうか。

○遠矢委員 そうですね。でも、本当に身につまされたのは、ただ単に希望フ

ファイルで希望を書いた、おしまいではなくて、希望が叶えられてこそ希望なんだから、そこにつながるものがあるからこそ、希望ファイルはそのきっかけにすぎないんだなということを強く感じさせられました。今、世の中もいろいろ進んできて、こういうことやりたいという人に対して、いいねと言ってくれる人とつながる仕組みが、ITも含めていろいろあるので、そういうものをうまく活用しながら、社会活動、ソーシャルアクションにつながる、その入り口にこの希望ファイルが置かれるという位置づけなんだなということを、2人の話から深く理解したように思います。ありがとうございました。

○大熊委員長 ACPとの関わりについては何かヒントがありましたか。

○遠矢委員 全く同じだなと思います。ACPというのは、どう死にたいですかという話では全然なくて、やっぱり残された時間をどう生き抜くかということだと思っているので、もちろん延命治療をどうしますかみたいなこともそうなんですけれども、あなたの希望なんだと思うんですね。しかも、それは病気の経過とか状況によっても変化していくものなので、常にその語り合いを繰り返しながら、今この時点ではどうだということを確認し合っていくことのプロセスがまさにACPでも言われていることで、全く同じようなニュアンスを感じさせられました。

○大熊委員長 ぜひそっちのプロジェクトにも、かなえるとか夢とか希望というのが入ると、その2つが矛盾なくできるので、両方に関わっていらっしゃる遠矢先生にはぜひとも役割をお願いしたいと思います。

○遠矢委員 はい。ぜひそうしていきたいと思います。
ありがとうございました。

○大熊委員長 中澤まゆみさんはいかがでしょう。

○中澤委員 人と人がつながっていくツールというか、やっぱりつながりをどうやってつくっていくのかというのがすごく大きなものになってくるんじゃないかと思うんですね。だから、希望ファイルについて語ることが仲間をつくったり、つながりをつくっていくという、そういう認知症について語る場をどんどんつくってほしいみたいなの、そこにやっぱり本人たちが入って、いろんなことを聞かせてほしい、先輩たちに聞かせてほしいというのはすごくあるんですね。

じゃあ、どういった悩みを持っているのか、どういった希望を持っているのか、そういったことも聞く中で私たちは考えていくと思うんです。だから、そういうきっかけにもなっていてくれればいいななんて思っています。

○大熊委員長 本人たちのワーキンググループがつくったものも、まさに先に認知症になった私たちから、次に続く人たちにサジェスションしましょうねというスタンスでできているので、先輩としていろんなことを教えるという立場

で参加してくださるといいなというふうに思いながら伺っていました。

西田さん、計画の中にどういうふうに組み込むかという部分も含めて、少しここで話しておいていただけると。

○西田委員 今日のお話を伺う中で、やはり希望ファイルというものが、いろいろ議論しながら、こういう形の機会をつくったり、こういう工夫をしていくともっと話しやすいとか、いろいろ知恵を出す時間というのがまだまだ必要だなと思うんです。そ条例計画の中で、いつまでにこういう希望ファイルの講習会や地域の催しを1つつくってみるとかですね、多分すぐにはできないと思うんです。というか、幾つかやりながらつくっていかなければならないので、希望計画の中に、いつまでにこういうことをつくっていくという、そういうロードマップといいますか、タイムテーブル、計画を入れていくことができると思えば、煮えの希望ファイルじゃなくて、みんなですごく議論して、こういうことがやっぱり必要なんじゃないかということが、ある程度納得のいくものが出せるのかなと思うんですけれども、そういうものを条例計画の中でしっかりと位置づけておくことはできないんでしょうか。

○佐久間課長 そこをどこまで求めるかというところになっていくんですね。いきなり全区的に一斉に始めます、というのは難しいと思いますので、まずは数か所ぐらいから始めて、そこで様子を見てどんどんバージョンアップして、ほかの地域にいいところを勧めていくやり方もあるでしょうし、どのぐらいの規模でやっていくのか。1つの町会で始めていくのか、それとももう少し大きい1つの地区で始めていくのかというやり方も違いが出てくると思うんですね。

今お二人から聞いたところだと、個人から始めてもいいのかなという気もしますので、まずは始められるところから始めていき計画の中では、それが1か所になるのか1つの地域になるのか。条例に定める希望ファイルについては、こういうプロセスでやっていきますよというのは書けるとは思います。

○西田委員 どうやって希望ファイルを世田谷区で実現していくのかという計画、今後の3年計画なのか、もっと早い計画なのかもしれませんが、1年後にはここまで行ってほしいですね、2年目にはここまで行ってほしいですねと、そういう計画を重ねていくプランをここで議論して決めて、条例計画の中に位置づけていただけるといいのかなと思うんですけれども。要は、数か月で書式の形をつくりましょうというふうにしてしまうと、こういう大事なお話を踏まえて、本来どうあるべきかというところが抜けちゃうのかなとちょっと思いました。

○永田委員 今のはとても大事な提案だと思いました。やっぱり完成版をつくるのが目的ではなくて、実際、世田谷の中でどのように知られて、関心を持

ってもらって、みんなでいいねって思ってもらって、浸透していきながら、最終的には希望を書いたものが実現できるようなアクションにつながらないと、書きっ放し、言いつ放しで、何か盛り上がってみんなでいっぱい書いたけれども消えていったねみたいになると、非常にもったいないことだと思います。

実は、そういう希望ファイルに似た前例が全国にとてもたくさんあります。何とか手帳とか私の何とかというのが、認知症の分野ですごくいっぱいあって、消えていった主なものは、みんなの知らないところで、つくった人たちは相当一生懸命、何度も会議を重ねていろんなものを調べて書式をつくったんだけど、一部でつくった後、こういう書式ですから皆さん書いてくださいというのを投げかけたけど、ほとんど誰も使わない。本人もそうだし、専門職も知らない間に書いてもらわなきゃ駄目みたいな負担感だけになってしまう。

今後広げていくことを考えると、一緒につくるところから、もっと地域の人とか専門職、ケアマネジャーさんとか、場合によってはお医者さんも入ってくれるかもしれないし、企業の人が入るかもしれない。そういう人たちも一緒に、多様な人で一緒に希望ファイルの活かし方とか、内容を練りながらつくり上げる、まずはバージョン1、第1版を来年度つくり上げて、それを基に各エリア、世田谷区内でそういうのを試行する地域を増やして、また次のバージョンを各地域で練って活かしていく、3年計画ぐらいのものを希望計画の中に、きちんとロードマップを入れておくことが大事なんじゃないかなと思いました。

○大熊委員長 まゆみさん、どうぞ。

○中澤委員 具体的に少し動くこともちょっと必要かななんて思って。例えば世田谷区、今はこのコロナであんまり動いていないんですが、39の認知症カフェがあります。ここの中で活動をきちっとやっているところが数件あるんですよ。そういう人たちとまずつながって、それでこの希望ファイルのことも含めながら、そして、S・さきこさん、藤原さん、できたら一緒に認知症カフェに行って、それとなく話し合う。希望ファイルは、私たちだったらどんなものをつくりたいかみたいな、そんなことを協力してくれる認知症カフェと始めてみるというのも取っかかりかなと思ったりしています。

○蓮見氏 S・さきこさんのパートナーとしてちょっと一言言わせていただきます。

今日、S・さきこさん、いろいろ苦しいとおっしゃっていたんですけれども、日頃はすごく前向きで、いつもいつも前向きなんですね。私が逆に励まされているぐらいで、本当にいろんなことを教えていただいていますし、こういうやっぱり苦しいこともあるんだなというのをお聞きし、私は、やっぱり一部分しか見ていないと感じました。やっぱり私たち地域包括の職員とか、ケアマネジャーはその方の人生の本当に部分的なところしか見れていないんですよ。

ですので、そういった希望ファイルというのをつくったときに、私もケアプランをつくる時ケアプランに、どうなりたいですかみたいなのを毎回同じようなことを書いてしまうというところもありますけれども、そうならないように、成年後見のエンディングノートとか、覚書とか、あんしんカードという社会福祉協議会さんがつくっている冷蔵庫に貼るようなものもあって、あと、お薬手帳に貼るといふようなものも出てきているんですね。それをノルマのように配って、皆さん書いてくださいと、みんなは、どれを書けばいいんだろうみたいなところがあって、現実と理想のギャップみたいなところを思っていたりするんですね。

本当に大事なものは、緊急連絡先さえ書いておいてくれればいいんだみたいになってしまうんですけれども、やっぱり希望ファイルってすごくいいなと思うんですけれども、そのときに皆さんが、本当に当事者の方が楽しい、これを作るのが楽しいなとか、本当にこれが実現できたらいいなという形になるようなファイルをつくるには、やはり皆さんの声が大事かなと思っていて。S・さきこさんも、今いろんなところからお誘いがかかっている、行動力があるので認知症カフェにも講演をお願いされていたんですが、。コロナで中止になってしまいましたが、あとカフェの会にも誘っていて、絵を描いたりとかしているんですね。

そこで、さっき妹様がおっしゃっていたように、現実として、そこに一緒に行く人が、ボランティアが見つからないんです。いろんなところに声をかけても、なかなかそういうパートナーが出てきてくれないという現実があるんです。本当にやりたいことがたくさんあって、それが実現できないもどかしさというのを今日お聞きしました。地域包括も地域の方にいきいき講座を開催するときの普及啓発ですね。成年後見制度のこととかでエンディングノートの話をして興味を示す方はすごく少ないんですね。実際書いているのかと思うと書いていなかったりとかね。それでも普及啓発をする。講座をやったということが実績になるみたいになってしまうので、いろんなのがあつち中で、せつかくつくるので、皆さんの声が届くように実現してほしいなと思う。

やっぱり楽しくなるような、お子さんとか子育て世代の方も来てほしいなと思うんですね。どんな世代も関係なく、全世代の方が希望ファイルを書きたいと思うようなファイルになればと思いました。

○大熊委員長 全世代にというのは、とっても大事なキーワードですよ。

どうぞ藤原さん、話してください。

○藤原氏 すみません、今お話を聞いている中で、私の中に希望という言葉がすごく漠然的なんですよね。具体的に、私に、じゃあ、今、希望は何ですかと聞かれたときに、これって言えないんですね。私はレビー小体型認知症なんで

すけれども、自分の希望を聞かれたときに、今の生活を無事に日々怪我なく、病気もなく過ごせたらいいっていう程度で、大きなものはないんですね。話を聞いている中で、そういう自分が何か前向きではないのかなとか、そういうふうに思ってしまうんですよ。

ですから、この会に出させていただいて、少しは自分が変わってきた部分もあるんですけども、じゃあ、自分に何ができるかと思ったときに、あまり浮かばないんですね。人に迷惑かけないで日々過ごせたらいいのかなっていう、すごくささやかなっていうか、それは私にとってはささやかではないというところが、すごく自分の中で葛藤があるんですよ。

○大熊委員長　でも、今日の藤原さんのお話からも話が広がって、みんながいろんなこと言い出したんですから、大したものですよ。

○永田委員　一言いいですか。私、認知症の本人の方と毎日やり取りしているんですけども、全く皆さん同じことを言う。希望って、そんな大それたものとか大きいものじゃなくて、今日一日、自分の生活が無事に平穩に過ぎて、そういうことが大事で、ただ、その普通に当たり前の日々の生活って、一人一人実はすごく違って、その当たり前の日々の生活って何なのかと、自分は何となく分かっているけれども、意外と伝えないと周りの人がそれを全然分からない。

だから、あまり大それた、外国旅行へ行くとか何か突拍子もない希望、そういう人もいるかもしれないけれども、それよりも今おっしゃったような、当たり前の普通に日々を暮らしていくって何なんだろうかみたいな、そういうディテールというか具体的なところ。これが自分は当たり前のようで、自分はこれにこだわりたいなみたいなものを出せることが実はすごく大事じゃないかなと、そういうことが本当の意味での希望にもつながっていくというのを、今日みたいなお話をしていただきながら、希望はすぐ暮らしの中にあるささやかなことで、でも、そのささやかなことが実は相当やりにくくなっている不自由さとかがあるんだみたいなことを、みんなも周りも気づけるように、積み上げていけたらいいなと思ってお聞きしました。

日常の大事さとか、当たり前なことや、ささやかなことの大事さを周りの人たちが気づかないでいる、当たり前に普通に暮らしているつもりでいるけれども、どれだけ普通にささやかなことができるかが大切なのかということをやっぱり区民全体にも知ってもらいながら、逆に言うと、ささやかなちょっとしたことの支援さえあれば、外出ももっと楽しめるし、諦めないでいいこともあるんだみたいなことが共有されて、それだったら手伝いに行くよとか、一緒に楽しもうよなんていう人が増えるといいなと思いました。

○大熊委員長　時間になっていて、この後の検討委員会の中では、ここでどんなことが話されたかということをお皆さんに言わなきゃいけないので、西田先生

から基本的なことを話していただくという時間にしたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

きっかけの物語をしていただいて、本当にありがとうございました。7時からの会にも参加してくださるとありがたいです。長時間ありがとうございます。

○佐久間課長 皆様からいただいた意見につきましては、まとめさせていただきます。

○大熊委員長 まとめないで、話し言葉そのままに、速記の方に書いていたものを皆さんに提供していただくのがよいかと思います。このニュアンスがすごく大切なので、お願ひでございます。

○佐久間課長 このあと7時から、この会場で検討委員会を行います。皆さまは、休養室へ移動願ひます。事務局の方で検討委員会の会場をつくらせていただきたいと思います。簡単な軽食も御用意しておりますので、休養室のほうで休憩を取っていただければと思います。

では、どうもありがとうございました。一旦こちらで休会させていただきます。

午後 6 時35分閉会